自然にかえる子供たち

――臨海学校騒動記――

小川　均

プロローグ

私たち『竹田津臨海学校グループ』は、毎年八月初旬になると原生花園の所在地として知られる小清水町で、臨海学校を開いている。そして昨年で三回目になった。竹田津臨海学校は名前から推して、一見まじめな印象をあたえるが、集まってくる連中はしたたかな個性と溌剌とした躍動で、中味の薄さを盛りたててくれる。

学校を始めたそもそもの動機は、「いまの子供たちは可愛想だ」という素朴な気持から出発した。公園はなし、広場はなし、遊び友達も少ない。朝起きてから床につくまで、ママや先生から、やれ勉強しろだの、放課後は校庭で遊ぶなのと小喧しくいわれている。管理々々の世の中で、夏休みもロタロタ遊べないとは気の毒だ。「一つ田舎の子供、都会の子供を集めて臨海学校でもやったるべか」と気軽に始めたのがこの学校である。が、なかなかどうして、集まった生徒たちの元気旺盛なこと。可愛想なのは先生ばかり。破天荒な臨海学校のようすを、いくつかのエピソードを混えながら紹介してみよう。

〝学校〟前で全員集合！　手前のヤギはありし日のロッテンマイヤー君、右はしが竹田津〝校長〟

エピソードI　知床の船上で

私たちは開校中一回は遠出することにしている。第二回（一九七三年）の遠足は、地元ウトロの桂田歓二氏の御好意で知床半島遊覧船観光とシャレこんだ。この日のオホーツク海はどこまでも青かった。空も青い。絶好の船出日よりであった。小舟は総員三五名が乗るとポンポンポンとウトロ港を出発した。

初めは波の心配もなかったが、沖に出ると小さな小さな釣り船は思いがけずピッチングをはじめた。初めは知床岬の先端まで意気揚々と大航海をするつもりであったが、われわれは太平洋にむけて出帆したマゼランほど勇気はなかった。海はそうやすやすと問屋がおろすはずがない。前日までの水泳疲れと夜更しで、子供たちの疲れた体調は効果てきめんにあらわれた。さっきまでは元気からいばりだった子供たちの何人かが、みるみる顔を青くして呕吐しはじめたのだ。

先生はといえば、昼の気疲れと酒宴と、恐ろしい子供たちの夜更しで、ロタロタ寝れず、睡眠不足ぎみで、内心生徒たちの振るまいに腹を立てていた。本来なら看病に献身するところなのに、この時とばかり、大の大人は青息吐息の子供たちにむかって罵声を浴せた。

「ざまあみろ」

また舟上でこんな場面もあった、今回は結局、生徒の健康状態が芳ばしくないので途中から魚釣りにした。ところが釣れるわ釣れるわ。糸を垂らすと三十センチ近いソイやアブラコがおもしろいほどかかってくる。ある女生徒は、小一時間に一八匹も釣りあげたほどである。

しかし、その子から五〇cmと離れていない隣りに不運な先生がいた。彼はどうしたことか釣り具を変えても、エサを変えてもいっこうに釣れないのだ。そこで例の先生これでは面子が立たないと思ったのか、隣りの女生徒に、「そこの場所をどけ」と言うなり、まんまと彼女の席を奪ってしまったが、相変わらず釣れないままだった。

学校の人員と施設

一九七二年に〝開校〟した竹田津臨海学校は、開設以来、「少数精鋭」の健全学校であることを「教員」一同は誇りにしている。生徒数は約二〇名。地元小清水町と、はるばる釧路や札幌、東京や大阪からやってくる小学生が各一〇名ていど、男女の比率もだいたい半々である。参加費は無料にしているが、昨年は「入学料」として二千円いただいた。ただ、交通費は受益者負担にしている。

生徒の入学に当たって、両親から「死んでもケガしても、一切責任はとらない。それでもよければ入学を認める」という内容の誓約書に、必ずサインしてもらっている。幸い、期間中にケガ人や病人は一人も出なかったが、誓約書の一件を聞いて参加をやめた人もいると聞く。また、両親の付添いは遠慮していただいている。このようなことをするのも、親の心配げな顔が陽に陰にチラついては、先生たちの足がすくんでしまうからである。「PTA」対策も大変である。

「先生」のほうは、だいたい北大農学部の大学院生が主体で、なかには東京方面から勤め先を休んで来てくれたもの好きな夫妻もいた。待遇は悪く、彼らは例外なく旅費もサラリーも出ない。報酬はといえば、飲み放題の酒と苦労だけ。しかし、どうしたことか毎年八～一五名は集まる。だから、先生一人に生徒二人の「個人教授」なみのはずだが、先生の仕事は、どうやら男は監視人、女は賄婦といったほうがピッタリする。

しかも、先憂後憂の〝差別対遇〟にはひどいものがある。先生は寝袋、生徒はフトンなどはまだよい。おさんどん、買い出しはゆうにおよばず、風呂焚き、後片づけも全部先生の仕事。これでは朝から晩まで休まる暇がない。

「校舎兼宿舎」は五DKほどの、離農した開拓農家を借りて行う。隣家まで二km、近くの商店まで四km、キッネの飛びだす大原野の一軒屋である。電気、水道はもちろんなく、頼りない石油ランプと小型プロパン二器で、四〇名もの胃袋をおさめようというのだから、どれだけ苦労が要るか想像できようというものだ。

エピソードⅡ　お化け大会で

夏の夜に、原野と子供がそろえば、お化け大会はつきものだ。これが子供に対するサービスというものだ。わが校もご多聞にもれない。ところが、そのお化けも現代子にかかると被害者になるという、以下は現代のお化け受難のお話である。

二回目の一九七三年のお化けは災難つづきであった。初めの予定は「一人一人線香をもって、橋のむこう岸に立ててあるローソクから火をつけてくること」であったが、いざとなって、大人たちは子供たちの情にほだされて、結局、グループで目的地に行かせることになった。大人たちは秘策を練り、思い思いに変装して予定の暗闇に潜んだ。

やがて、遠くの方から子供たちの咽の奥からしぼりだしたような歌声が近づいてきた。恐ろしがっているのは、いまや明らかだ。ある先生、いよいよ暗闇からフワーと身を踊りだそうとした瞬間、暗い夜道から小さな足が飛んできたのに気づいた時は、すでに手遅れだった。次の瞬間、顔を強打されて、もんどりうってドブ川に落ちてしまった。あまりの痛さに一〇分間は立てなかったそうである。帰って来たときには、目がまっ赤に腫れて、「お岩」さんになっていた。

余談だが、その先生は学校が終わるとすぐに、道北の浜頓別に調査にむかった。ところが、ますます目の痛みは激しくなるばかり、とうとう眼科医を捜せばならぬ事態になってしまった。しかし、神はこういうときこそ見離すものなのだ。弱り目にたたり目で、眼科と名のつく病院は、浜頓別にあろうはずがなく、一〇〇kmも離れた名寄にしかなかった。過疎地の苦しみ痛みを、文字どおり身体を通じて思い知ったしだいである。

一方、その頃別の不幸がおきていた。例のローソクが置いてある橋のたもとにぶらさがって隠れているもう一人の〝お化け〟役の先生も、同様な不運に見舞われていた。彼は子供を脅かすどころか、子供が彼のぶらさがっている手を故意に力いっぱい踏みつけたのだからたまらない。下は川、お化けが痛がるのも不自然と、悶々と苦しみもがいていたのだった。

後で、「子供は天使なのではない、悪魔だ！」という結論にたっした。そのほか、腰をぬかした女の子、高さ五mの橋から落ちた先生、子供たちからドロ水を浴びせられた先生など、数々の事件があったが、そ

れは省略する。

開校まで

ところで開校の準備は、小清水と札幌で平行して行われる。小清水では、生徒の人選と校舎の整備と引っ越しが主である。特に、校舎に子供たちのために生活道具を運ぶのが一大事。当地の家畜診療所の獣医師で、この学校の「理事長兼校長」である竹田津実さんの家からは、鍋、茶碗、布団などすべてが運びだされるのだ。一昨年は飼われていたタヌキまで引っ越した。家に残ったものといえば、「タンスと木柵と風呂桶だけだった」というほどである。また、遠足用のバスや船のチャーター、ペット用のウマ、ヒツジを借りる交渉、校舎の危険個所の修理や掃除など、仕事は急がねばならぬ。そして、開校数日前になると、東京や札幌からやってくる生徒、先生がたの出迎えと、竹田津さんの家に泊まる生徒、先生で、竹田津さんの家は大混乱になる。

かたや、札幌では先生志願の人達との連絡や、東京や大阪からやってくる子供たちの引率にあわただしく時間が過ぎてゆく。昨年は特に国鉄ストの余波を受けて大混乱となった。

こうして、開校式には生徒二〇名、先生十数名が、晴れて「校長」のありがたい訓辞を傾聴するのである。ある年の校長先生の短い訓辞はこうだった。「えー、今日から三日間は、ふだん、親や学校で禁止していることは、あー、ここではやってよろしい」。

エピソードⅢ カレーライス事件

ある日の夕食はカレーライスだった。その日の日中は水泳で、全員が特に腹ペコになっていたから、生徒の中にはおかわりする者が続出した。

さて、ある生徒が山盛りのカレーをおかわりした。しばらくして、その生徒、「もう食えない」といいはじめた。そこにいあわせたある先生、せっかくの料理が残されてはかなわんと、例の生徒を実に下品な言葉で脅しはじめたのである。「おめえ、残したらブッ飛ばすぞ！ 後で電気アンマ千回だからな」。この年は、当学校のお仕置は自慢できた話ではないが、電気アンマや股さきであった。これは、生徒にとって殺し文句である。

ところが、びっくりしたのは問題の生徒の隣りにいた子のほうである。これ以上食べれない腹に、無理にカレーライスを詰めこまざるをえなかった。それも涙を流しながら。

そんなこととは露知らぬ間抜けなその先生、なおも脅しつづけていたのだった。

その後、かの子は激しい腹痛におそわれてしまった。食い過ぎであることはもちろんである。そこへ、事情を何も知らないくだんの先生が現われ、腹をかかえて苦しんでいる彼を発見した。

「〇〇君、腹がいたいのかい？ 薬をあげるから飲みなさい」と大バカを演じた。食えない話とは、こういうことをいうのであろう。

教育には熱心でない

せっかく原野あり、川あり海ありで、また動物や植物に詳しい人達がいるのに、絶好の野外理科教室や自然保護教育の場として利用しないとはもったいないと思うが、私たちの学校では、あえてそのようなことはしないことにしている。これらが大事なことは認めるにしても、いささかその理屈には承服しがたいものがあるからだ。現在の自然破壊や公害の根源的原因に、自然保護教育の欠如があるという考えは、にわかに認めがたいからである。

いいわけがましいかもしれないが、昆虫採集や植物採集が理科教育にたいして効果があるとは思えないが、それにしてもただちに極悪非道の自然破壊者に育つわけでも

あるまい。私はこれらの行為が全面的に悪いものとは思っていない。それにここは田舎である。自然保護という、いわば都会的センスをこんなところまで持ちこんでほしくないのである。

たとえば地元参加者の子供たちに、バッタは採るな野草を摘むな、と締めつけたところで意味はない。まして「生命をいつくしめ」というお話が実り多いとは思われない。都会の子供たちにとっても、こんな機会はまたとないのである。

自然保護教育がともするとモラル論や道徳論のごとき個人的な問題に矮小化されてしまう傾向は否定できない。子供たちの夢の翼を広げてくれた野や山、公園や道路が奪い去られ、自然が損なわれたからと、こんどは子供たちに「自主規制」を求めるのは、いささか本末転倒のきらいがある。しかも、自然破壊や公害が本質的にモラルや道徳の欠如に由来するものではないにもかかわらず、それをこのような問題にすり替えてしまう危険すら感じられる。

この学校では積極的に奨励はしないが、野草や昆虫を採集しても、別にとがめないことにしている。むしろ、せっかくの短かい期間だから、勉強やシツケに時間をさいて、堅苦しいものにするよりもその分、遊び時間を増やすほうを採用したいのである。ただ、自然保護教育と関連あるが、当学校の方針は、自分で出したものは、すべて自分が仕末することを徹底させている。

エピソードⅣ　あざなつけ

短い期間中に、仲よしになるものもあれば、親しくならぬままに、数日間がすぎてお別れする人もいる。お互い知りあうには、なんとしても期間が短すぎる。それはそれとして、あざなはやはり親密度と関係していると思う。あざなは、また子供たちのユーモアでもある。

子供たちの気転の早さと、頓智と吸収力の旺盛なこと、順応能力の高いこととあいまって舌を巻くばかりである。以下、その数例を紹介しよう。

「ディスタジョッキー」。東京からやってきた女生徒。おしゃべりなこと、物知りなこと、物怖じしない性格がアダとなって、こんなあざながついた。

「ドラキュラ」。先生の一人。昼間はさえない顔をしているが、夜になると活気が出る。犬歯の生え具合が、いかにもその名にふさわしい。

「座頭市」。先生の一人。スイカ割りのとき、映画の「座頭市」のものまねをして、子供たちを笑わせた。風体髪型もぴったりである。

「茶坊主」。下品なあざなであるが、歴っきとした先生の一人。自己紹介のおり「茶坊主のつもりで使っていただきたい」とあいさつしたのが運のつき。あざ名の意味を知ってのうえか、三才の女の子にまで「茶坊主、茶坊主」とこき使われた。

「インディアン」。上半身裸の男が長髪にバンドをしてこつぜんと学校に現われた。部屋にはいるなり、「俺、インディアン。ウソつかない」と、胸を連打した先生は、れっきとした大学院生だが、最後まで生徒は信じなかったと聞く。

「大僧正」。インド帰りの頭を丸めた青年。インド式腰まきをして、地べタに寝るを常とする。

「巨人症」。背がスラッと高い美人教師。からかわれると、いつも生徒を追いまわしていた。先生というより生徒というにふさわしく、いまは高校教師。

まだまだあるが、プライベート尊重の意味からやめておこう。生徒たちの生き生きとした観察眼は、みごとに先生の容姿や性格をとらえているのにはただただ感心するばかり。

学校は知らぬ人達がよい

私たちの学校は、集まって顔をあわせるまで誰が誰で、どんな人たちが来るのか、

まったく分からない魔法の玉手箱なのである。そして、三日なり四日なり同じ屋根の下で、メシを食い、先生方が酒を飲み、一緒に遊んで何日かを過してから解散する。後はまた、それぞれ別の生活があるのだ。一見ドライに思うかも知れないが、この学校はこれでよいと思っている。臨海学校での悪ふざけや失敗が、その場かぎりの一過性で終わり、後々までもちこさないからである。

町内会や学校が主催するこの種の学校では、そううまくいくまい。秋、学校が始まり、悪さを発見された先生に会うとバツ悪く感じた経験は誰にもあろう。それでは気持も萎縮してしまう。そう考えると、せっかくの楽しみもくじけがちになるというものだ。青空のもとで大自然に囲まれながら先生の一挙手一投足に気がねしてるようでは、心の底から楽しめない。

私たちの学校では、前述のエピソードに見られるように、生徒が生き生きとして、むしろ先生のほうが圧倒されがちである。というのも、生徒にしてみれば、後の恐ろしさを気にしなくてもよいからだと思う。だから先生のほうも、極力生徒の気持をくんで、屈託なく、堅さもないよう努力している。そして、そのためには〝管理的支配〟をしないよう心がけている。ここは私設の臨海学校なのだ、ということを肝に命じている。

狭い宿舎に、たった三〜四日の間過すのだから、支配的な秩序体系や価値体系を導入することは、結局、彼らの行動を制約することになる。管理されない子供として、ほんの一時でも昆虫を採集し、水泳し、大人たちと遊べる機会を作ろうというのが、わが学校の主旨みたいなものだからである。寝起きをともにするのは、知らない子供たちにかぎる。

エピソードV　手紙

三回目（一九七四年）の臨海学校の折りには、子供たちの両親に手紙を書かすことにした。文面から子供たちの反応を見たかったことと、学校のようすを両親に知らせたかったのが理由である。初めは、それでもなかなか書こうとはしなかった。が、なだめすかして、結局子供たち全員にまんまと書かせてしまった。

手紙の内容は種々雑多で、なかには、まだ登ってもいぬ山に登って、山頂から見た景色はすばらしかったけど疲れましたので、これでやめます、などという「創意」あふれた手紙があった。なかでも、大阪から来た小学校二年生の文章は、教師一同の涙と爆笑を呼んだ。

「おとうさん、おかあさん、まだ生きています。
おとうさん、おかあさん、もうすぐかえれます。
おとうさん、おかあさん、もう死にそうです」。

エピローグ

私たちの学校は、こうして、生徒も先生も「死にそうになる」ほど遊び疲れて終わりをつげる。最終日の朝、あわただしく記念写真を撮り、やがて生徒たちはバスや列車に乗って帰っていく。先生がたは、四日間、遊びくらした砂浜を、原野を、小川を思い思いに詰めたリュックを背おった生徒たちを見送る。駅まで行くトラックに乗った子供たちの姿は、みるみる小さくなり、やがて白っぽいホコリの中に消えていく。

いままで、「死にそうになる」まで遊んだ経験は、子供たちにあったのだろうか。これから先、心をなぐさめてくれる自然が周囲から消えうせ、受験に追われながら育っていく彼らは何を支柱に生きていくのだろうか。物質的に豊かな子供時代を送った彼らは、やがてむかえねばならないであろう食糧危機、エネルギー危機、人口爆発という、未曽有の出来事に、どう対処していくのだろうか。

遠くに去っていくトラックをながめながら、先生たちは、誰しもきっとこう考えていたに違いない。やれやれ、これで終わりだ。疲れきった体を休めよう。そして、来年もまたやろう。今度は一つ子供たちを肴にビールででも乾杯してやろう。もう一度彼らが去っていた道路を見て、先生方はシーンと静まりかえった家の中にはいっていた。さようなら、さようなら。

（北海道大学教育学部）

（付記）
竹田津臨海学校は竹田津実・雅子夫妻を始め、有形無形に多くの方たちの惜まぬ協力と援助によって支えられてきた。しかも、一回開催するとそうとうの赤字になる。が私たちは赤字になることは、たいした問題ではないと考えている。周囲の暖かいご支援とご理解こそが、なにものにもまして励ましであることをこの学校の体験を通じて学んだからである。今日まで、竹田津臨海学校を盛りたてていただいた先生役の人達をはじめ、大勢の方々に、この紙面を借りて改めてお礼を述べるとともに、今後のいっそうのご協力をお願いしたいと念じております。
最後に、小学校四年生を頭に四人の子供たちをものともせず、孤軍奮闘していただいた雅子夫人には、特に感謝するしだいです。